

みそぎはらえ  
『禊 祓』

青柳 敏行

## 1. 序論

### (1) はじめに

禊とは身体を洗い濯ぐことで、身についた凶事や罪穢を除去して清めることである。具体的には伊邪那岐が、死後に醜悪な姿と化した伊邪那美の住む黄泉国から帰った時に、その穢れを祓うために川で行った行為を指している。禊を行った結果、伊邪那岐自身が自ら生んだ諸神の中で最も貴いとした三貴子（天照大御神、月読命、須佐之男命）が生まれたことが神話の起源である。禊と祓は一連の行為・観念であることから禊祓と称することが多いが本来は別であり、禊は自主的な行為（滝に打たれる等）で、祓は他力的な行為（神主の祝詞等）である（『神道事典』、國學院大學日本文化研究所編、弘文堂）。

神道においては、養老年間（717年～724年）に定められた『神祇令』に依り、穢れに触れぬようにする「いみ」と穢れを除き去る「はらえ」のふたつで慎みを期す齋戒を要求し伝承してきた。現在、神社本庁で定めている『齋戒心得』には「齋戒中にある者は、沐浴して、身体を潔め、衣服を改め、居室の別にし、飲食を慎み、恩念・言語・動作を正しくし、汗穢・不浄等に触れてはならない」の記述がある。禊祓の最も簡単なものは手水であり、多くの神社には手水舎が設けられており、要するに「清くなる」という意味である。「清くなる」ということは罪や穢れを取り去ることであるが、罪や穢れは人間の本性に具有しているものではなく、生活と共に附着してくるものであって、結果的に避けることができない。祓うことは枉がったものを直すことであり、祓えによって現前する清浄の境地こそ、人間本来のものである。罪や穢れの可能性は、禊祓の終了と共に再び存在するため、神道の禊祓を繰り返し行う必要が生じる（『神道原論』、谷省吾著、皇学館大学出版部）。

心の無意識領域における潜在意識の歪みや曇りは、ヒューマン・エラーを誘発する。潜在意識の歪みや曇りは言霊が原因であり、具体的にはインパクトの強い言葉や否定的表現により齎される。ヒューマン・ファクターとは錯覚・不注意・近道行為・省略行為に代表される人の行動特性であり、ヒューマン・エラーとは人の判断ミスや不注意が原因である。

人の無意識領域最下層には人性を離れた神性がある。常に情報収集と判断により一般的行動を掌る最上層の顕在意識へ働きかけているが、言霊が持つインパクトの強い言葉や否定的表現が無意識領域にある潜在意識に歪みや曇りを齎し、本来の神性を遮断してしまう。このような状況に陥ると、突発的な事象に遭遇した際に、人は正常な判断を下すことが出来なくなって事故を引き起こす虞がある。

本論文では、心の無意識領域における潜在意識の歪みや曇りがヒューマン・エラーを誘発する原因と推定し、定期的な禊祓は潜在意識を洗い清めるための有効であることを考察した。

### (2) 論点

厚生労働省は、中小事業者等も含め、事業場の規模、雇用形態や年齢等によらず、どのような働き方においても、労働者の安全と健康が確保されていることを前提として、多様な形態で働くひとりひとりが潜在力を十分に発揮できる社会を実現に向け、国、事業者、労働者等の関係者が重点的に取り組むべき事項を定めた2023年4月～2028年3月までの5年間を計画期間とする「第14次労働災害防止計画」を2023年3月8日に策定し、同年3月27日に公示した。

労働災害の実に9割以上の原因がヒューマン・エラーと言われている状況を鑑み、JR西日本は、2005年に起こした福知山線脱線事故後の取り組みとして、ヒューマン・エラーの撲滅に取り組んでいる。福知山線脱線事故では、乗客と運転士合わせて107名が死亡、562名が負傷した。原因として、非常ブレーキ、乗用車衝突、並びに線路置石が疑われたが、裏付ける傍証がなかった。

当時、JR西日本は、経営姿勢が抱える問題として、国鉄時代から並行する阪急電鉄等の関西私鉄各社との激しい競争に晒されており、私鉄各社との競争に打ち勝つことを意識するあまり、スピードアップによる所要時間短縮や運転本数増加等、目前のサービスや利益を優先した点が指摘されている。その結果、目標が守られない場合、乗務員に対する処分として再教育等の実務に関連したものではなく、日勤教育という懲罰的なものを科していた。具体的には、乗務員休憩室や詰所、点呼場所から丸見えの当直室の真ん中に座らせ、事象と関係ない就業規則や経営理念の書き写しや作文・レポートの作成を一日中させた。それが十分な再発防止の教育としての効果に繋がらず、却って乗務員の精神的プレッシャーを増大させていた温床との指摘を受けている。

JR西日本の事故原因は、懲罰的な日勤教育が運転手の心の無意識領域における潜在意識の歪みや曇りとなり、ヒューマン・エラーを引き起こした虞がある。ヒューマン・ファクターは人間の特性であり、無くすことはできない。ヒューマン・エラーを無くすことができないならば、原因となっている潜在意識の歪みや曇りを取り除く措置を施すことで、事故を削減できる可能性があると考えられる。

## 2. 本論

### (1) 顕在意識と無意識

顕在意識と無意識の割合を海洋に浮かぶ氷山に譬えると、海面下に相当する無意識の領域は、海面上に相当する顕在意識の領域と比較して圧倒的に奥深く、無意識の領域は95~97%であり、顕在意識の領域は3~5%に過ぎないと言われている。

人の心や意識は最も身近な究極の謎で、存在を感じることができるが正体は不明である。通常、人は身体の不調を感じたとき、X線写真撮影や血液検査等により原因を詳しく調べようとするが、心や意識は脳という人の器官の働きで生まれたものであり、脳がどのように働くことで心や意識が生まれているのか、その仕組みがよく分かっていないのが現状である。

町田宗鳳は、顕在意識と無意識の構造を「心の五重塔」と呼び、海上に浮かぶ氷山に擬えて説明している(※1)。

< 顕在意識 (氷山の海上部分) >

顕在意識 (最上層) ; 一般的行動を齎す情報収集・判断

< 無意識 (氷山の海中部分) >

潜在意識 (第二層) ; 突発的行動を誘引する情念

個人無意識 (第三層) ; 個人体験の記憶

普遍無意識 (第四層) ; 先祖・民族の記憶

光の意識 (最下層) ; 人が本来持っている神性



出典 (Wikipedia) ; 氷山

光は常に無意識領域の最下層（光の意識）から上方へ照射されているが、通常、潜在意識の領域でブロックされてしまう。光がブロックされる原因は潜在意識に潜んでいるインパクトの強い否定的記憶であり、これが潜在意識の歪みと曇りである。潜在意識の歪みと曇りを取り除くことができれば、突発的行動が抑制され、ヒューマン・エラーを抑制することができるという。

高橋雅延に依ると、米国心理学者ウィリアム・ジェームズや英国人類学者フランシス・ゴルトンが無意識の記憶の存在を確信していたと述べている(※2)。

山崎広子は、声は無意識の領域と繋がっており、AV (Authentic Voice、正真正銘の自分の声)で話すことは顕在意識と無意識の隔壁を壊し、健康・性格・容姿に大きく影響するとして無意識の關係に言及している(※3)。

鎌田東二は、日本においては歌うことによって心を静め、祀ることによって共同体を静めるのが、神道的な世直し的心観や心直しの技（わざ）の基本形であった。歌と祭りが神道の技であり、祭儀に当たっては、穢れを禊祓いし清めることで初源の清明心を取り戻せるという(※4)。

馬淵睦夫は、日本人は信仰の根源を共有しているので、どのような異国の神を信仰しようとも、宗教感情の根源は揺るがない。このような日本人の性格は、物事に白黒をはっきりさせないという人間関係の知恵にも表れており、外国宗教への寛容さは、事実上、我が国に宗教戦争が無かった一つの理由であると言及している(※5)。

J.W.T.メーソンは、神道は人類の祖先が神に遡ること、即ち、人と神霊とはひとつであるという潜在意識的直観を表わさんがために祖先を崇拜するとして神道の根本原理を捉えている(※6)。

最後に、上田賢治は、神道信仰の特徴について、この世界は完全ではないが、神の子として生まれ、同じく神の子である国民が生成の営みに勤しむ限り、天地と共に無窮の弥栄を寿がれてある国土であると述べている(※7)。

以上から、日本人の無意識領域には人性を離れた神性があり、その神性は常に顕在意識へ影響を及ぼしているものの、何らかの原因により、無意識領域にある潜在意識に歪みや曇りが生じると、神性が遮断され、突発的な行動を引き起こす状況になると想定することができる。

## (2) 潜在意識の歪みと曇り

佐佐木隆は、言霊について、『古語大辞典（小学館）』を引用し、言霊が祝詞等に潜んでいることを指摘し(※8)、棚次正和は、言霊の思想的根拠を万葉集の歌を根拠に分析している(※9)。また、樋口達郎は、『古事記』および『日本書紀』に記されている言挙が災厄を招く原因になっているとし、生物の発する声音には何らかの霊性が宿っていると言及している(※10)。

豊田国夫は、言挙という発話行為について、言挙の制禁観は言語の精霊観の消滅面を示すもので、災禍を避ける恨みの教訓的意味を持っていたとしている(※11)。さらに、言語の物神化について、人々は言葉に呪縛されて、宣誓、誓詞、声明、布告、告示等を重視し、宣伝、広告、情報等の言葉表現に大きな価値を認めるようになったと言及している(※12)。

最後に、川村湊は、小林秀雄・江藤淳・吉本隆明といった現代の文芸評論家たちの言語観の本質的な部分に、言霊と呼んでよいような言語についての思惟が伏在している。遡ると、賀茂真淵や本居宣長を源流として、富士谷御杖、平田篤胤、橘守部、鈴木胤といった国学者達に引き継がれ、小泉八雲、柳田國男、折口信夫等の文学者たちにまで流れ込んできているものではないかと考えたとき、言霊論は他界論と別なものではないという確信が生まれたと言及している(※13)。

### (3) 潜在意識を洗い清める

それでは潜在意識を洗い清めるために、どのような手段を用いればよいのであろうか。町田宗鳳は、母音が共鳴して倍音へ変化し、高周波音効果が中枢脳へ影響（ハイパーソニック・エフェクト）を及ぼすと、歌声・読経等により、脳波がベータ波からアルファ波へ変化、潜在意識の情念を洗い清めることができると論じている(※1)。

ハイパーソニック・エフェクトとは、可聴域を超える周波数成分を持った音が、人の生理活動に影響を及ぼすとする現象・学説を指すという。人の聴覚能力はおよそ 20kHz（キロヘルツ）が上限とされ、それ以上の周波数を持つ音波は人にとって聴こえないため、音と見做されてこなかった。

しかし、近年では脳機能イメージングといった客観的手法により、超音波を含む音の全身（聴覚と身体）での聴取が、生理活動、主に脳活動で快さを示す反応を齎すことが報告されている。

この現象は大橋力らによる先駆的研究により、ハイパーソニック・エフェクトと名付けられた。未解明点の多い現象ではあるが、米国生理学会の学術誌 *Journal of Neurophysiology* に閲覧上位にランクされて高い関心を集めている。

## 3. 結論

### (1) 結果

人はインパクトの強い言葉や否定的表現により潜在意識に歪みや曇りを生じ、これらが原因となってヒューマン・エラーを誘引する虞がある。従って、潜在意識を定期的に洗浄することで、ヒューマン・エラーの削減を期待できる。

### (2) 考察

禊祓は、潜在意識を洗い清めるための、神道における基本的な考え方である。

## 4. 引用文献等 (※) 一覧

- (1) 町田宗鳳、『無意識との対話』、2017年7月1日発行、「こころを読む」NHKテキスト
- (2) 高橋雅延、『記憶の深層』、2024年7月19日、第1刷、岩波新書
- (3) 山崎広子、『八割の人は自分の声が嫌い』、2014年11月25日、第1刷、角川SSC新書
- (4) 鎌田東二、『世直しの思想』、2016年4月21日発行、春秋社
- (5) 馬淵睦夫、『新国体論』、2019年12月1日第1刷、ビジネス社
- (6) J.W.T.メーソン、『神道の本義』、2019年5月15日第1刷、富山房インターナショナル
- (7) 上田賢治、『神道神学』、2012年9月1日第7版、神社新報社
- (8) 佐佐木隆、『言霊とは何か』、2013年8月25日発行、中公新書
- (9) 棚次正和、『宗教の根源』、1998年2月20日初版、世界思想社
- (10) 樋口達郎、『言霊と日本一言霊論再考』、2017年11月10日初版第1刷、北樹出版
- (11) 豊田国夫、『言霊信仰』、1985年3月20日初版第1刷、八幡書店
- (12) 豊田国夫、『日本人の言霊思想』、1980年5月10日第1刷、講談社学術文庫
- (13) 川村湊、『言霊と他界』、1990年12月10日第1刷、講談社

(了)